

令和6年8月24日

## 福井県内科医会学術講演会 特別講演2

### 「医師とAIの相互補完によって向上する内視鏡診療」

今回は上記表題で大腸内視鏡画像診断補助としての人工知能（以下 AI）の開発経過を詳細な経過をお示し頂いた。山田先生が開発に携われた内視鏡 AI 「WISE VISION®」は日本電気株式会社が得意としていた顔認証システムを内視鏡診断に応用する形で開発が始まり、内視鏡専門医の先生方が作成した教師データを AI に深層学習させることですすすめられた。この時の先生方の作業のお話をお聞きすると AI という最先端な情報技術の開発にも関わらず内視鏡専門医の先生方のデータ作成や最終チェックなど人海戦術的な努力が多いことに驚かされた。

内視鏡 AI の変遷についても触れられ、当初は病変の検知のみであったが現在は質的診断まで可能な所まで技術は進歩し、現在、進行中の DESIGN AI-05 試験では深達度診断を可能とすること目的としており、将来的には内視鏡 AI が病変の診断のみならず最適な治療方針まで示してくれる所まで研究を進めたいと今後の展望を示された。

大腸内視鏡 AI においては、本邦ではすでに3社から診療で利用できるプログラム医療機器として患者還元されており、精度の高い支援を受けることが可能な状況となっている一方で承認の基準（有効性と安全性）を考えた場合、多くの問題も残っている。性能

評価試験での評価方法の統一化、保険償還等である。評価方法の統一化においては、現在進行中のアジア諸国を中心とした国際共同試験（Project CAD）でも議論されているとのことで同試験の発表時には評価統一の在り方が示されるのではないかとのことであった。保険償還については、今年6月より内視鏡的大腸ポリープ・粘膜切除術において内視鏡 AI を使用した際に病変検出支援プログラム加算として60点が保険収載された。しかし、内視鏡 AI の導入コストを考慮すると十分な加算とは言えず、普及するには今後の増点が必要とも話された。

最後に、内視鏡 AI は更なる発展していくことは間違いないが、あくまで診断支援であり医師にとって代わることも無いことも強調され、内視鏡に携わる医師はこれまで通り修練を重ねる必要があることもお話された。

以上、内視鏡 AI の開発の始まりから、AI の有用性と残された問題点、現在進行中である最新の臨床試験のお話など、内視鏡 AI 分野のオピニオンリーダーの一人である山田先生の講演は適時で非常に興味深く有意義な内容であった。

（文責 医療法人 福山会 福山医院 福山智基）